

学会だより No. 112 2020年10月1日

発行：上智大学哲学会

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1 上智大学哲学研究室内

TEL：03-3238-3806 FAX：03-3238-4414 郵便振替：00140-8-194788 HP：

<http://dept.sophia.ac.jp/human/philosophy/>

☆第 93 回上智大学哲学会大会のお知らせ

今秋、下記の要領で第 93 回上智大学哲学会大会を開催いたします。万障お繰り合わせのうえご出席くださいますよう、ここにご案内申し上げます。

今回の大会は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、Zoom を利用したオンライン学会となりました。参加をご希望の方は 10 月 23 日(金)までに上智大学哲学会のメールアドレス(sophia.philosophy.society@gmail.com)までご連絡下さい。折り返し、ミーティングの ID とパスワードを送付させていただきます。

日時：2020 年 10 月 25 日(日)10:30~15:25

会場：Zoom によるオンラインでの開催

★ プログラム

I 特別報告 10:30~11:05

。趙恩(本学文学研究科博士前期課程)

帰国報告-ストリートアートの芸術的可能性について-

II 研究発表 11:10~12:25

。高木もえみ(本学文学研究科博士後期課程)

レーヴィットの共同存在論

。三浦太一(中部大学人文学部講師)

プラトン『パイドロス』における狂気の価値

III 総会 12:25~12:40

— 休憩 —

IV シンポジウム 13:30~15:25(途中休憩 10 分を含む)

。誰がなぜ尊厳をもつのか

提題者：芝元航平(本学哲学科非常勤講師)

中村信隆(本学哲学科他非常勤講師)

司会：寺田俊郎(本学哲学科教授)

V 懇親会(オンライン) 15:35~16:30(予定)

☆シンポジウム：誰がなぜ尊厳をもつのか

寺田俊郎(本学哲学科教授)

遅くとも二十世紀半ばには「人(人間、人格)の尊厳」は国際法規でも国内法規でも重要な概念の一つになった。国連憲章や世界人権宣言、日本国憲法やドイツ基本法にも「人の尊厳」が謳われている。このように「尊厳」は「人権」とともに国際社会の法と倫理の基本的概念の一つになっている。また「尊厳」概念は、二十世紀の終わり以来、生殖補助技術や遺伝子技術など生命倫理上の問題をめぐる議論において重要な役割を演じるようになってきている。しかし、その一方で、「尊厳」概念には、その曖昧さに対する批判を筆頭としてさまざまな批判があり、論争が続いている。

本シンポジウムでは、この「尊厳」という重要でありながら、いや重要であるからこそ、論争のさなかにある概念を、その担い手(「誰が」と根拠(「なぜ」)に焦点を当てて再考してみたい。そうする理由は、一つには、「尊厳」概念をめぐる哲学的議論が尽きていないこともあるが、それにとどまらない。筆者の見るところ、「尊厳」の概念は「人権」の概念と同様、それを哲学的に探究することがそのまま現代を生きるわれわれの倫理ないし道徳の理解を深めていくことになる、いわば現代の根源概念の一つなのである。

「尊厳」概念はヨーロッパの哲学史の中で長い歴史をもつ。古くは古代ローマのキケロが「人の尊厳」を論じたことが知られており、中世、近世、現代と論じ継がれてきた。哲学史に興味のある人なら、ルネサンス期のピコ・デラ・ミランドラの演説「人の尊厳について」や十七世紀のパスカルの『パンセ』の「考える葦」の断章、十八世紀のカントの「目的自体」としての人格の思想などが即座に思い浮かぶだろう。

そうした哲学的資源を掘り起こす意味も含めて、本学哲学研究科出身の二人の研究者、芝元航平氏と中村信隆氏に提題をしていただく。芝元氏にはトマス・アキナスを中心に中世哲学の観点から、中村信隆氏には現代の英語圏における論争を中心に倫理学の観点から論じていただく予定である。「尊厳」概念の探求を通じて、現代を生きる我々の倫理ないし道徳の理解をともに深める機会となれば幸いである。

☆シンポジウム 提題要旨

人間の尊厳概念の根源としての中世哲学？

——人間の尊厳の観点からトマス・アキナス『神学大全』を読む——

芝元航平(本学哲学科非常勤講師)

人間の尊厳概念の発展を論じる上で、中世ヨーロッパの神学思想におけるペルソナ概念の議論が持つ重要性はしばしば言及される場所である。本提題では、その代表例としてトマス・アキナスの『神学大全』における議論を取り上げ、それが人間の尊厳概念に対してどのような意義を持ちうるかを考察することによって、人間の尊厳概念の理論的根拠

の探求に対して中世思想が持つ可能性を提示することを目指したい。

多くの中世の神学者と同様、トマスもボエティウスによる「理性的本性を有する個の実体」というペルソナの定義を採用している。そこでは、理性的本性を持つことがペルソナの条件であり、その限りで尊厳という特別な価値を持つとみなされている。さらに、中世のペルソナ概念の議論においては、ボエティウスの伝統と共に、サン=ヴィクトルのリカルドゥスによる「神的本性を有する共通されえない実在性」という共通不可能性に基づくペルソナの定義があり、トマスもそれを積極的に評価している。したがって、トマスのペルソナ概念には、理性的本性に基づく特別な価値という側面と、他の存在者との共通不可能性に基づく個人の存在の代替不可能性・かけがえのなさという現代における人間の尊厳概念にとって不可欠な二つの側面が総合されていると考えられる。

その一方で、トマスは、被造的世界の諸存在者の階層的な秩序を考えている。その観点では、知性的存在者の中で最も低い位置にいる人間の完全性の段階は、非理性的動物よりも上にあるが、諸天使よりは下にあるということになり、一見、人間の理性的本性の持つ価値は相対性を免れえないようにも思われる。しかし、トマスは、キリスト教の伝統に従って、人間が「神の像」(imago Dei)として造られたと考えており、さらに、この表現の意味は、理性と自由意思を持つ人間が「自らの行為の主」であることにあると述べている。人間は理性を持つ限りで、普遍的で完全な善についての本性的な理解と欲求を持ち、その完全な善(神)と合致する可能性を持つのである。このような完全な善への本性的可能性において、個々の人間が自らの本性において有限なものでありながら、何らかの絶対的な価値を持つことが説明されているように思われる。

ところで、このような理解に対しては、救いの実現可能性が完全に断たれてしまった知性的・理性的存在(悪魔や地獄の住人)にも尊厳はあるのか否かという疑問が生じるであろう。そのような疑問に対してトマスが明快な回答を示しているとは言い難いが、本提題ではトマスの立場からの可能な解釈も考えてみたい。

*

人間の尊厳の根拠としての理性と尊厳の担い手の問題

—天使・動物・犯罪者の尊厳をめぐる—

中村信隆(本学哲学科他非常勤講師)

西洋の伝統に従って言えば、尊厳の概念は元来、高位の社会的階級およびそれにふさわしい威厳や名誉として規定され、「或るものが他のものよりも上位にある」という比較において成立する相対的な概念である。この相対性は「人間の尊厳」という概念にも保持されており、人間の尊厳は、伝統的には、人間がこの宇宙の中で何らかの能力ないし特性のゆえに特別に高位の階級にあることを意味している。しかしなぜ人間はそのような高位の階級にあるのか。人間の尊厳の根拠となる能力ないし特性とは一体何なのか。そしてそのような尊厳をもつ存在者は人間だけなのだろうか。尊厳の根拠と担い手をめぐる問題に関し

て、本提題では以下の 3 つの論点に関して自分自身の見解を提示し、討論のための材料を提供したい。

(1) 人間の尊厳の根拠をめぐるおそらく最も代表的な立場は、その根拠を理性ないし自由を求める立場であろう。ただし理性という能力と自由という特性は必ずしも重なるものではなく、どちらを重視するかによって尊厳の担い手に関する立場も変わってくる。この点に関して本提題では、自由ではなく理性、特に道徳的規範を認識し、それを適用し、自分の行為を統制するという道徳的な理性の能力こそが尊厳の根拠だという提題者の立場を提示し、そのうえで完全な理性的存在者とされる天使のような存在者にも尊厳を認めるのか、認める場合、それは人間の尊厳と同じものなのかといった問題について論じる。

(2) 尊厳の根拠を上述のような理性能力とした場合、人間以外の動物はそのような能力をもたないのか、もつとしたらそういった動物も尊厳をもつことになるのか、そしてその尊厳は人間の尊厳と同じものなのか、といった問題が生じる。この点に関して本提題では、大型類人猿やその他知能の高い一部の動物も尊厳をもち、従ってその尊厳に見合った扱いをしなければならないが、同時にその尊厳は人間の尊厳よりも下位の尊厳であり、人間との間には一種の主従関係が成立することを論じる。

(3) 尊厳の根拠を道徳的な理性能力と考えた場合、道徳に反した行為をした人は、尊厳をもたないことになるのかという問題が生じる。この点に関してカントは、たとえ理性能力を発揮せずに道徳に反した行為をしたとしても、犯罪者は、理性の「能力」をもった人格である限りは尊厳をもつと理解していると解釈できるが、このような理解は「犯罪者は一時的に理性能力を行使できなくなった一種の病人であり責任主体ではない」というカント自身も否定するような考え方につながりかねない。本提題では、犯罪者に尊厳を認めつつ同時に責任主体とも見なすことができる一つの道筋を提示する。

☆特別報告要旨

「帰国報告-ストリートアートの芸術的可能性について-

趙恩(本学文学研究科博士前期課程)

2018年11月～2020年7月までのアイルランドへの語学留学において、自身が異国の地で何を経験し考えたかについての報告となる。それに伴い、日本と比較した時に、アイルランド含めたヨーロッパの方で盛んであると言えるストリートアート、いわゆる「グラフィティ」という文化をデューイの芸術論を引用しながら考えていきたい。

モダンアートという分類での「グラフィティ」は、ニューヨークが発祥の地とされており、当時アートとしての地位を得ていなかったグラフィティは、ただの落書きとみなされ、建物などの器物損壊行為ともされる迷惑行為の一部とされてきた。しかしながら、徐々にグラフィティがその反社会的なメッセージ性の含有や、ステンシルなどといった技法が用いられることによって、パブリックアートとして一部認められるようになり、モダンア

トとしての地位が認められるようになってきたと言えるだろう。

アイルランドにおいても、街の中にグラフィティが点在しており、巨大な壁画や街の小さな装飾として人々から親しまれているものもあれば、荒涼とした場所にめちゃくちゃに描かれているものもある。それら両者の在り方を踏まえると、グラフィティというのは同じ傘の下に「アートとされるもの」と「アートとされていないもの」が混在している分野であると言える。つまりグラフィティの正体を考察することは、単なる落書きであったものがどのようにアートに昇華されていくのかという点を議論することとなるはずである。なぜならグラフィティの性質として、デューイの芸術論における「衝動性」というところに親和性があると考えられるからである。

今回の報告では、実際にグラフィティがどう制作されているのかという実際的な事にも触れながら、一部のグラフィティがアートというレベルに昇華されるまでのプロセスに具体的な例も挙げつつ注目していくようなものになりたいと思う。そして最終的に私の研究対象であるデューイの芸術論から、このグラフィティというものの内にどれほど芸術作品としての性質が認められるかというところまで触れることができればと思う。

☆研究発表要旨

レーヴィットの共同存在論

高木もえみ(本学文学研究科博士後期課程)

カール・レーヴィット『共に在る人間としての役割における個人』(以下『個人』)は、1927年に執筆された彼の教授資格論文である『倫理的諸問題の現象学的基礎づけ(Phänomenologische Grundlegung der ethischen Probleme)』にいくつかの変更を加えた上で刊行されたものである。レーヴィットはこの論文において、現象学的分析によって、人間が「共同相互存在(Miteinandersein)」として規定されていることを示すのであるが、レーヴィットはこの論文以降、「共同相互存在」という自らが提起した人間の存在論的規定をさらに発展的に展開させることをしておらず、それどころか1930年代以降の論文では、哲学を人間学的なものとして基礎づけるという『個人』の方針を明らかに転換して、自然の世界へと目を向け、人間をそのうちに位置付けようとする傾向が見られる。このような事情から、『個人』という論文はレーヴィットの一連の研究のうちに位置付けることが困難なものとして、それ自身完結した「共同存在論」として読まれるか、ハイデガーが『存在と時間』で論じた存在論に対する批判として、ハイデガーの思想と対比的に扱われることがほとんどである。

本発表では、第一に、レーヴィットの「共同相互存在」という人間についての規定がフョイエルバッハの思想の影響を多分に受けていることに着目して『個人』におけるレーヴィットの問題の所在を明らかにすることを目的とする。レーヴィットが提起する「共同相互存在」の概念は、フョイエルバッハの哲学を批判的に解釈し、継承したものである。レー

ヴィットは思索に対する現実世界の優位を認める点でフォイエルバッハに一致していた。第二に、『個人』におけるレーヴィットの問題が明確にされることにしたがって、人間を共同相互存在として規定するというレーヴィットの試みが持つ意義が示される。この試みには、レーヴィットの一連の研究における重要なテーマの一つである、近代ヨーロッパ思想に対する精神的批判の萌芽が既に見てられる。『個人』においてレーヴィットは、特殊な個としての人間に対する共同相互存在という一般的な概念の優位性を主張しているのであり、この主張は、永遠性に注目して書かれたヘーゲル以降の時代を中心とした哲学的研究や、歴史と自然に関するレーヴィット自身のその後の研究と関連づけて理解されなければならない。

*

プラトン『パイドロス』における狂気の価値

三浦太一(中部大学人文学部講師)

プラトン対話篇『パイドロス』は哲学者を狂気の者とする興味深い箇所を含んでいる。言論と対話による知的探究を為す哲学者が、何故理性だけでなく、狂気をも併せ持つのだろうか。本発表は哲学者の狂気の内実を明らかにし、それが如何なる点で、多くの人達が被る狂気や、古代ギリシア社会で権威を持った詩人と予言者達が持つ神与の狂気と異なっているかを示す。

『パイドロス』において狂気というテーマは、エロース、すなわち、恋あるいは恋の神をめぐる評価の衝突の中に現れる。恋をある種の病、正気を喪失した状態であると批判し、自分に恋していないものをこそ恋人にしなければならぬと主張するリュシアスの言論に対抗して、ソクラテスは二つの演説をなす。第一の演説では、エロースは有害なる狂気と見なされる。恋する者は快樂の奴隷となって知的能力を失い、更に、恋が止めば正気に戻り狂気の際にした約束を守らない。だが、ソクラテスは自らその演説が愚かで不敬度であったと断じ、第二の演説を開始する。それによれば、予言者の神託や詩人の創作に見られるように、人間にとって最善のものは神的な狂気によって与えられる。そして、哲学者の魂はエロースの狂気に与ることで、かつて天上の世界で神々の行進に随行して見た、真の美を想起することになる。

本発表では、『パイドロス』の狂気をめぐる近年の解釈論争を検討しながら、哲学者が持つエロースの狂気は、その当人の知的能力と主体性に対する影響の仕方において特殊であることを示していく。ソクラテスの第一演説の中では、恋する者は快樂の奴隷となり、エロースと狂気に支配され知的能力を失っている。そして、第二の演説で一見評価されているように見える詩人や予言者達の場合も、彼らの能力は神に取り憑かれて賦与されるもので、自らの能力に対しての主体性を持たない。他のプラトン作品『イオン』も考慮にいれば、詩人達は自らの作品についての知識すら持っていないのである。以上の人達が持つ

狂気に対し、エロースの狂気は哲学者の魂に自身の神的本性を自ら発見させる。そして、魂は天上の世界にいた際の記憶により、自らの神的な習慣や活動を得ることになる。哲学者の狂気を鑑みること、なぜ人間には知的探究において狂気が必要であり、また、いかなる狂気が求められるべきかが示される。